

QSK 一人は皆のために 皆は一人のために

福岡県脊髄損傷者連合会
2015年6月10日

わだち

No.190

福脊連ホームページアドレス www.normanet.ne.jp/~ww101926/

『敗戦七〇年』ニよつて格差社会へ(3)

二〇日、安保法制を巡り党首討論がはじまった。(国会中継をみた。) 岡田克也(民主)代表は、「後方支援について聞く、自衛隊の活動の範囲は飛躍的に広がった。武器、弾薬の輸送はできる。武装した兵士も運べる。戦闘の現場ではないが、相手から見たら同じだ。」

安倍晋三首相 「戦闘が起った時は直ちに部隊の責任者の判断で一時中止、あるいは回避することを明確に定めている。後方支援活動を行うのは戦闘が行われない場所だ。」(戦闘に、そんな単純な線引きがある訳がない。ここは『戦場ではない』と選択視できる、線引きされるものなか、「敵×味方」双方とも常に「忍び寄る敵」を見つめて、銃口・ミサイル(砲弾)を射程距離において、前進して来る。これが戦場なのだ。〜我々は、後方支援をする部隊で『戦闘にきた部隊』では決してありません。武装は、身を守るためのもので、戦闘(人殺しをする武器使用)はしません〜と進むのか……………

岡田代表「存立危機事態について。武力行使の新三要件が満たされれば、日本の自衛隊も出て行って戦う。その場所は相手国の領土、領海、領空に及びが。首相」今までと同様、海外派兵は一般に禁止されている。〜省略〜他国の領土、領海、領空で武力行使をすべしとしよう。〜派兵はない。機雷除去は、い

わは『一般に』ということの外において何回も説明をしている。」「**岡田代表**「アメリカの戦争に巻き込まれることは絶対ないか。」「首相」〜助けてくれと言われども、そこに行くことはあり得ない。武力行使の新三要件に合致しなければ、あり得な

《わだち目次》

『敗戦七〇年』ニよつて格差社会へ(3)	・・・1P
福脊連第37回総会報告	・4P
戦後七〇年の障害者運動と憲法	・・・7P
スリルとサスペンスに満ちた〜背損ドラマ劇場〜運命の門可港行普通列車	・・・10P
学校運営自民党提言について	・・・11P
今月の時事	・・・16P

い。」

松野頼久(維新)代表「八月までの通常国会で安全保障法制関連法案を成立させるのか。」

首相「審議時間ありきではない。」

しっかりとした、深い議論して貰いたい。」

志位和夫委員長(共産)「過去の日本の戦争は、間違った戦争と認識あるか。」

首相「先の大戦で、多くの日本人の命が失われた。同時にアジアの多くの人々が戦争の惨禍に苦しんだ。我々は戦後70年間平和国家として歩みを進めてきた。だからこそ、地域や世界の繁栄や平和に貢献しなければならぬ。」

志位氏「戦後の日本は、1945年8月にポツダム宣言を受諾してはじまった。ポツダム宣言は、日本の戦争について、間違った戦争だという認識を示している。この認識を認めないのか。」

首相「ポツダム宣言を、つまびらかに読んでいないので、直ちに論評することは差し控えた。」

「二二日、志位和夫委員長は記者会見で「事実誤認がある。本日に読んでいなかったことがうかがえる。」と皮肉を飛ばした。志位氏は、自民党幹事長代理だった首相が月刊誌「Voice」2005年七月号の対談で「ポツダム宣言というのは、米國が原子爆弾を二発も落とすまで日本に大変な惨状を与えた後』とつた』とばかり(で)こう語るに(ただ)きつたものだ。」と語っていたと指摘。だが、宣言は1945年7月26日に米英中の名で発表され、同8月6日と9日の原爆投下後、日本が同14日に受諾を決定した。志位氏は「(宣言)二二日原爆が落ちた後に『ただきつられた』ものではない。事実誤認がある。」と述べた。(2015年5月22日

朝日新聞朝刊4Pより)政治学者、原彬久のインタビュー岸信介は、「いかに日本を弱体化させるか、いかに日本を再び立ち上からせないようにするかが、占領政策のすべてであった。」

「(岸信介証言録)」「この岸の考えを受け継ぐのが、孫の安倍晋三(六〇)だ。安倍は占領政策の狙いをこう説明する。欧米に、(を)引いた日本を二度と欧米に立ち向かうことができないように、国家として脆弱な基盤しか持たない状態にして、アジアの片隅にひっそりと存在する内向的な国にしようという考えです。」(月刊誌「正論」2010年4月号)では、岸の言う「真の独立日本」とは何か、とくに問題にしたのが、憲法九条で自前の軍隊を持つことを禁じている点である。論文では「祖国を吾々の手に依って防衛すると云ふことは独立国として当然の義務であると同時に

に権利」と反論。独立後も米軍が国内に留まり続けていることを年頭に、『他国の軍隊を国内に駐屯せしめて、其の力に依って独立を維持するといふが如きことは真の独立国の姿ではない』と断じた。憲法改正によって、自ら軍備を備え、「真の独立日本」を取り戻す(70年目の首相一系譜・3 5月23日・朝日新聞朝刊4頁より抜)・「三つ子の魂」と驚いていてもはじまらない。これは、現在進行形の「政(まつりごと)」「なのだ。当時の発表後の反応(ウイキペディアより抜粋)(詳細は「太平洋戦争 戦争末期」および「日本の降伏」を参照)

『ポツダム宣言の発表をつけた日本政府では、この宣言に対する対応を検討した。宣言文の翻訳に当たったのは、条約局第一課長下田武三であった。外務省定例幹部会は、受諾はやむを得ないが、未だ交渉の余地はあ

り、「黙っているのが賢明で、新聞にはノー・コメントで掲載するよう指導するのが適当である」という決定を行った。

これをうけた外務大臣東郷茂徳は、最高戦争指導会議と閣議において、「本宣言は有条件講和であり、これを拒否する時は、極めて重大なる結果を惹起する」と発言した。

しかし、陸海軍からは、いずれ本宣言は世論に伝わるため「断固抵抗する大皇帝」を発せられるよう、指導するよう主張した。結局東郷の意見が通り、ポツダム宣言を公式に報道するものの、政府は内容について公式な言及をしないということが閣議決定された。

7月27日、日本政府は宣言の存在を論評なしに公表した。処が、翌28日の新聞報道では、読売新聞で「笑止、対日降伏条件」、毎日新聞で「笑止！撃破せん、聖戦飽くまで完遂」「白昼夢見

を露呈」などという新聞社による論評が加えられていた。

また、陸軍からは、政府が宣言を無視することを公式に表明するべきであるという強硬な要求が行われ、同日、首相鈴木貫太郎は記者会見で「共同声明はカイロ会談の焼直しと思う、政府としては重大な価値あるものとは認めず「黙殺」し断固戦争完遂に邁進する」(毎日新聞、1945年(昭和20年)7月29日)と述べ、(記事見出しは全て現代式表記・仮名使いに修正)、翌日朝日新聞で「政府は黙殺」などと報道された。この「黙殺(Mokusatsu)」は日本の国家代表通信社である同盟通信社では「ignore it entirely(全面的に無視)」と翻訳され、またロイターとAP通信では「reject(拒否)」と訳され報道された。東郷は鈴木が発言が閣議決定違反であると抗議している。なお、ラジオ・

トウキョウがどのように応えたかは確認されていない。トルーマンは、7月25日の日記で「日本がポツダム宣言を受諾しないことを確信している」と記載したように、日本側の拒否は折り込み済みであった。むしろ、宣言のみによる降伏ではなく、宣言の拒否が原子爆弾による核攻撃を正当化し、また組み合わせて降伏の効果が生まれると考えていた。8月6日には広島市への原子爆弾投下が行われ、同市における甚大な被害が伝えられた。また、8月9日(日本時間)の未明には、ソ連が日ソ中立条約を一方的に破棄し、満州国、朝鮮半島北部、南樺太への侵攻を開始(ソ連対日参戦)、ポツダム宣言に参加した。これらに衝撃を受けた鈴木は、同日の最高戦争指導会議の冒頭で「ポツダム宣言を受諾する他なくなった」と述べ、意見を求めた。強く反対する者は

おらず、また会議の最中に長崎市への原子爆弾投下が伝えられたこともあり、「国体の護持」「自発的な武装解除」「日本人の戦犯裁判への参加」を条件に宣言の受諾の方針が優勢となった。しかし、陸相阿南惟幾はなおも戦争継続を主張し、議論は天皇臨席の23時からの最高戦争指導会議に持ち越された。

10日午前2時過ぎ、議長鈴木より聖断を仰ぐ奏上が昭和天皇になされた。※記事の紹介は紙数に關係しておわりませんが、後は検索してほしい。戦争の「はじまりとおわり」の経緯と戦争を進めて来た人間の「所業」を検証することも必要。愚かなことを「愚かに繰り返すのも人間」なのだ。

現国会で「憲法改正一安保法制」についての、審議が本格的にはじまった。決して、見過ごしてはならない「夏の陣」なのだ。(しん)

スリルとサスペンスに満ちた
〜脊損ドリアマ劇場〜

運命の門司港行普通列車

それは、ゴールデンウィーク前の病院受診からはじまった。

水分をしっかりと取って、採尿したのだけれど、病院で検査すると細菌が多数で「このままでは、熱が出る可能性がある」ので薬を出しましょう。一週間飲んでください」とのことだった。

薬を飲んでも、その時だけで飲み終わると元に戻るというのが、今までの経験だった。細菌と共存しているのか、少々濁っていても、発熱をしたことはない。それでも医者の言うことは、聞かなければならない。

一ヶ月分の薬を買って、一ヶ月後に来院してください」と言われながら、薬は二ヶ月

持っている。そういうことを何度か繰り返ししている内に、「薬が無くなったら、来てください」と言われるようになってしまった。そんな私は、いたって真面目な患者である。

発熱するのも嫌だから、真面目に服薬した。

なぜか、抗生薬を飲むとお腹が緩んでしまう。何とか、お腹とも折り合いをつけながら、服薬を終了した。

そんな折、宿泊を伴う会議が入った。いつものようにJRでお出かけ。一寸お腹の具合も心配だったが、無事終了。帰りの電車、いつもは快速に乗り換えて帰るのだが、普通電車で帰ることにした。しかし、途中から嫌な予感

と危険な臭い。

電車は一駅一駅、確実に停まって行く。なぜか、私が乗っている乗降ドアからは一人も乗ってこない。

このまま、誰も乗ってこないのか、どこかで乗ってくるのか？

まだまだ一時間は、乗っていないといけない。

一駅一駅、停まるたびに乗客がいないか確かめる。「いない」。そして、次もない。次もない。

なぜだろう？この電車には乗客は乗ってこないのか？そんな思いと恐怖を乗せて、門司港行普通列車は走り続けていく。

快速列車だと、いつも満席状態で走っている。普通列車は、こんなのだろうか？

いや、そんなはずはない。

どこかで、乗ってくるはずだ。スリルに、満ちすぎていく。運を天に、任せるしかない。轟々とレールの音を響かせて、鉄橋を渡る。遠賀川である。ここまで来れば、着いたも同然。

車内放送は、「次は水巻」と告げている。

はたして乗客は？

「おのよ、おのよ。」
「乗車ありがとうございます。若松方面、福北ゆたか線は、お乗り換え下さい」
おのよ、おのよ。

私のいる乗降口からは、一人も乗ってこず、スリルとサスペンスに満ちた、普通列車の旅が終わった。

そして、駅には家路を急ぐ車椅子の姿があった。

(北九州支部 白川 長廣)



《 今月の時事 》

米国の歴史学者ら。「安倍首相に一過去の過ち清算へ、大胆な行動を期待―」の「声明を発表」した。米国の日本研究者や歴史学者ら 187 人が、戦後 70 年間の日本の近隣諸国の平和を称賛し、第2次世界大戦以前の「過ち」について「全体的で偏見のない清算」を呼びかける声明を発表した。慰安婦問題などの解決で、安倍晋三首相の「大胆な行動」に期待を表明している。「日本の歴史家を支持する声明(ネットで検索可)」は、5日に日本語と英語で公表した。日本の研究者への応援という体裁だが、日本政府や国民へのメッセージにもなっている。声明は、戦後日本の「民主主義、自衛隊への文民統制、警察権節度ある運用と、政治的寛容さ」などについて「全てが世界の祝福に値する。」と評価。一方で、「慰安婦問題等をめぐる「歴史解釈の問題」が世界からの祝福を妨げていると指摘した。～日本の研究者・同僚と同じように、私たちも過去の全ての痕跡を慎重に天秤(てんびん)に掛けて、歴史的文脈の中でそれに評価を下すことのみが、公正な歴史を生むと信じています。この種の作業は、民族やジェンダーによる偏見に染められてはならず、政府による操作や検閲、そして、個人的脅迫からも自由でなければなりません。私たちは、歴史研究の自由を守ります。そして、すべての国の政府が、それを尊重するよう呼びかけます。」とある。一方、5年に一度の「核軍縮の進展等を点検する核不拡散条約(NPT)再検討会議は、最終文章案の選択に失敗し、決裂して幕を閉じた。」とのニュース(22日)。約1カ月の会議では、核保有国と核軍縮の停滞にいらだつ非保有国との溝が埋まらなかった。」という。「核のない世界」を唱えるオバマ政権主導で進んだ米口の核軍縮も、ロシアのクリミア合併宣言などで米口関係が悪化したこともあり、停滞しているようだ。が、要は、「核の抑止力」という「脅威・恐怖心」という「脅迫行為」による「政治的均衡関係」というか、お互いが「軍事力」で「歯止めをかける。歯止めになる」という。「協同幻想」にあるとも云えないか。「国際連帯」という天秤が、成立しないところ。そこは、人知・智慧と歴史的文脈での握り方を示してほしいものだ。が、愚かさゆえにそれが「屈折した」祭り事(政)に豹変するのか・・・(しん)

会員・賛助会員の皆様にお知らせです。『わだち』の原稿を募集しています。
意見・提言・新年・雑感など何でも可能。原稿を書いてくださる方は、事務所に
メール添付・郵送・FAX等で送ってください。どうぞよろしく願います。

- 編集 福岡県脊髄損傷者連合会 会長 藤田 幸廣
〒816-0804 福岡県春日市原町3丁目1-7
福岡県総合福祉センター(クローバープラザ)内6階
TEL&FAX: 092-592-4528
E-Mail: fukusekiren-kasuga@cello.ocn.ne.jp
- 発行 九州障害者定期刊行物協会 頒価100円(会費に
含まれる) 〒812-0054 福岡市東区馬出2-2-18

編集後記
わだち編集と私の検査入
院が重なり、皆様にわだち
が届くのが遅れて、申し訳
ありません。(坂本)



この広報誌は、共同募金の配分金を受けて発行しています。